

ドローンを用いた中小河川の環境モニタリング法の開発

山口大学大学院 赤松 良久

1. 緒論

近年、山口県内においても河川災害が頻発しており、被災後の災害復旧工事や災害調査には被災前の河川の横断形状や植生繁茂状況の情報が必要とされている。しかし、従来の定期的な河川横断形状の測量や航空写真撮影による植生繁茂状況の把握には多くの労力と予算を必要とするため、山口県内のですら十分な河川情報の整備が行われていない状況にある。

そこで、本研究では近年様々な分野で活用が期待されているドローンを用いて、山口県内の中小河川における河床形状や植生繁茂状況などの河川情報を効率的に収取する方法を検討し、実用的な中小河川の環境モニタリングシステムについて検討する。

2. 方法

2.1 現地調査

検証サイトは、佐波川の、河口からの距離が約8.5kmに位置する約250mの区間とした。図-1に、検証サイトの空中写真（オルソ画像）を示す。

まず、空中写真撮影とほぼ同期した測量（同期測量）として、2016年1月5日に、図-1に示すように縦横断方向に約15mピッチで、底面高のRTK-GPS測量を行った。機器としてはTrimble R4 GNSS（ニコン・トリンブル）を用いた。

次に、2016年1月6日に、対象区間において陸上対空標識の設置と測量、およびドローンによる空中写真撮影を行った。対空標識は右岸に2個、左岸に5個の計7個設置した。空中写真撮影は、高度約25mからほぼ鉛直下向きに、約5~10mピッチで行い、270枚の画像を得た。

2.2 デジタル標高モデルの作成

現地調査で得られた空中写真と対空標識の測量結果を元に、デジタル標高モデルを作成した。ソフトウェアとして、通常のSfMの画像処理にはPhotoScan(Agisoft)、その後の処理にはArcGIS10.2(ESRI)を用いた。空間補間には、3次多項式による2次元補間を用いた。

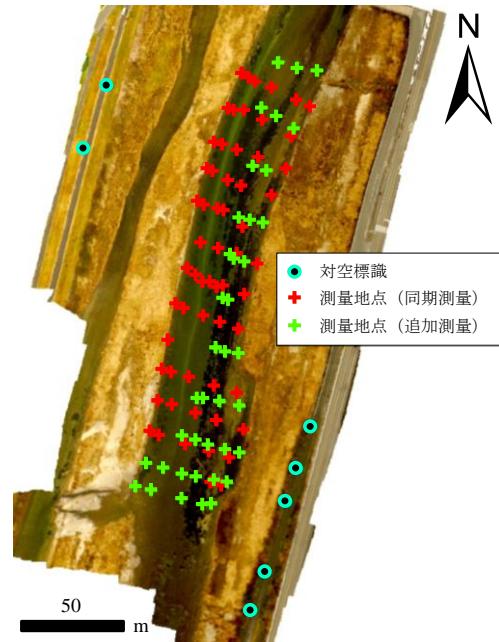


図-1 検証サイトのオルソ画像と測量地点

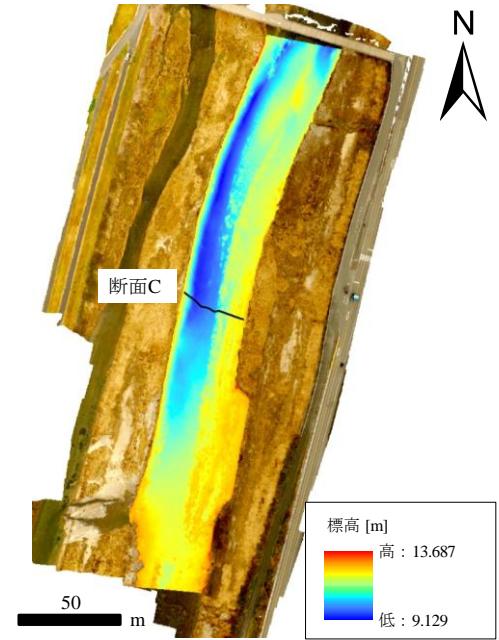


図-2 写真測量から得られたデジタル標高モデル

本研究では、撮影位置によらない簡易的な補正方法として、補正係数を水の空気に対する相対屈折率(1.34)とする方法を用いた。すなわち、見かけの水深に相対屈折率を乗じて、真の水深を推定した。

3. 結果と考察

図-2にUAV-SfM手法で得られた、冠水部分について

の水面屈折補正後のデジタル標高モデルを示す。これらの図より、堤防から水面下に至る河道地形が詳細に表現されている様子が観察できる。なお、この河川区間は逆勾配であり、下流側で標高が高くなっているのは誤りではない。

写真測量で得られる水面下の標高は原理的に表面高（底質の表面すなわち上面の標高；底面高と差があるのは、底質が植生のときのみ）であるが、河川測量では底面高（河床高；植生の場合、植生の基部の砂泥の標高）が求められる。そこで、写真測量で得られた標高を底面高とみなしたときの精度を把握するため、図-3に、同期測量におけるRTK-GPS測量値と、写真測量による水面屈折補正前後の標高推定値の散布図を示す。この場合の底面高の推定誤差（写真測量による推定値-RTK-GPSによる実測値）の統計量は、平均が-0.068 m（わずかな過小評価傾向）、RMSが0.165 mであった。推定値を実測値で説明する単回帰直線の決定係数は0.93と大きく、写真測量の結果を底面高とみなしても、全体的には良好な精度となった。一方で、測量地点のうち、推定誤差が最も大きい2点(0.351 m, 0.333 m)は、写真の目視判読からオオカナダモの分布域にあった。当該領域では実際に数十cm厚のオオカナダモが確認されており、写真測量がオオカナダモの表面高を推定することにより、結果を底面高として扱った場合には大幅な過大評価となることが示唆される。

水面屈折補正の効果を例示するため、図-4に、図-2に示した断面C（後述の河道方向位置に依存するバイアスが小さい断面）における、同期測量における標高の測量値と、水面屈折補正前後の推定値の分布を示す。この図からも、水面屈折補正が正しく機能していることが分かる。

また、本研究で用いたUAV-SfM手法によって図-5に示すような3次元画像が作成され、高水敷に繁茂する植生高さも把握可能である。今後は植生の繁茂状況モニタリングへの活用法について検討していく予定である。

4. 結論

UAV-SfM手法を用いた河道測量技術を国内で初めて、冠水部分について水面での光の屈折を考慮して適用し、精度を検証した。その結果、水面屈折の補正是、見かけの水深に屈折率を乗じる単純な方法でも、主要な誤差要因にはならならず、正しく機能することが明

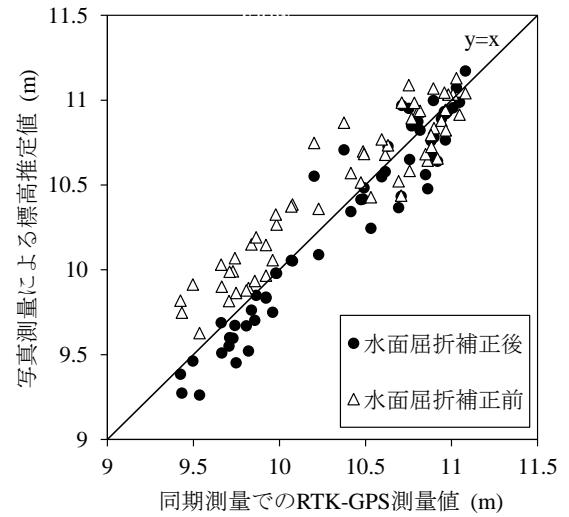


図-3 同期測量におけるRTK-GPS測量値と、写真測量による水面屈折補正前後の標高推定値の関係

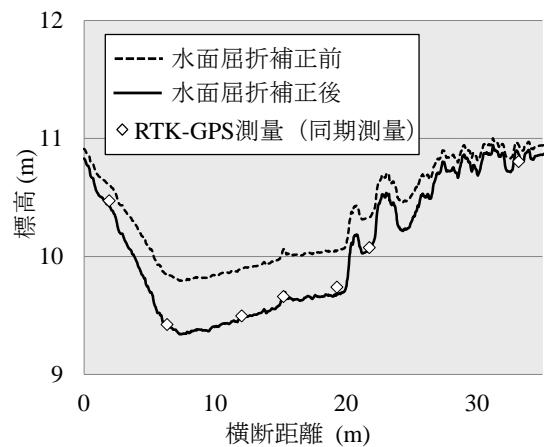


図-4 断面Cにおける、水面屈折補正前後の標高の推定値と、RTK-GPSによる測量値の分布

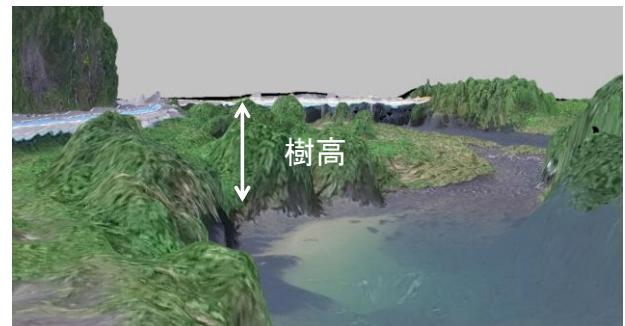


図-5 UAV-SfM手法によって得られる3次元画像

らかとなった。したがって、UAV-SfM手法を用いることによって、定期的な河床形状測量が行われていない中小河川においても簡易に定期的な河床形状モニタリングが行える可能が示唆された。